

# 女子大國文

第百七十号

令和四年一月発行

女子大國文  
第百七十号

令和四年一月発行

京都女子大学国文学会

女子大國文

第百七十号

令和四年一月十五日 印刷  
令和四年一月三十一日 発行

〒605-8585 京都市東山区今熊野北日吉町三番地  
編輯兼 京都女子大学国文学会  
発行者

電話 〇五二五三一九〇七六  
FAX 〇五二五三一九二二〇  
振替 〇〇〇一五一一三四

〒603-8484 京都市上京区上長者町通黒門東入  
印刷所 西村印刷株式会社

電話 〇五二四一四一〇八代  
FAX 〇五二四三二六二八二

二〇二二年度公開講座

申文の文体ひとつ

——「望請」するのは何か——

滝川 幸司 (一)

『後撰集』伊衡女詠と「長恨歌」

—— 歌句「いづこをはかと」から (上) ——

北條 暁子 (二三)

冰青居藏品図録(古筆切編)

—— 歌合(二) —— …… 池尾 和也 (四六)

彙

報

(九五)

京都女子大学国文学会

## 彙報

○女子大國文第一七〇号をお届けします。

○新入生歓迎行事、公開講座の感想文を掲載しました。

### 研究室だより

○本学教授の山崎ゆみ先生が、令和三年十一月三十日、急逝されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

○前号彙報欄でご報告しました通り、新型コロナウイルス感染症の流行がある中、今年度は例年とは異なるかたちでの行事の開催を模索してまいりました。新入生歓迎行事と公開講座は、オンライン (Zoom) にて開催させていただきました。

○本年度本学科に就任された中西俊英先生 (仏教学) が、令和三年九月四日・五日に大谷大学で開催された、日本印度学仏教学会第七十二回学術大会にて、第六十三回 (令和二年度) 日本印度学仏教学会賞を受賞されました。日本印度学仏教学会は、会員数が二千名を超す、人文系の学会としては日本最大規模の学会です。年一回、顕著な研究成果を挙げている若手研究者に対して、学会賞が授与されています。中西先生は、中国仏教の華嚴思想を専門とされ、近年は日本仏教にも研究

領域を広げられています。今回、主な受賞理由となった成果は「東大寺図書館所蔵の凝然『華嚴五教賢聖章』」(『印度学仏教学研究』第六十九卷第二号) です。中世東大寺における修学の実態を解明する研究として、高く評価されました。中西先生に心よりお祝いを申し上げます。

### 二〇二一年度国文学会行事 (後期)

○新入生歓迎行事 能楽鑑賞会

九月十四日 (火) 午後一時より

- ・お話 (能の歴史について)
- ・装束着付および実演
- ・お話 (お囃子について)
- ・楽器紹介および実演
- ・謡体験
- ・お話 (狂言について)
- ・狂言『寝音曲』
- ・仕舞『橋弁慶』

※当日のお手伝いを担当していただいた学会委員の方と運営担当

教員のみ、音楽棟2階演奏ホールにて対面で参加しました。

※対面参加の学生委員の方には、「装束」「囃子」「狂言」「能」のパートに分けて、感想文を執筆していただきました。

#### ○公開講座

十月二十九日（金） 午後一時より

「漢文を読むということ ― 申文の文体を中心に―」

大阪大学大学院文学研究科教授 滝川幸司先生

「平安時代の柿本人麿」

山形大学地域教育文化学部地域教育文化学科個別任期付教授

藤田洋治先生

※滝川先生より、御講演内容を本号に御寄稿賜りました。藤田先生の御講演内容を次号に御寄稿賜る予定です。

※滝川先生の公開講座感想記のうち、漢文ゼミ四回生の方々は、卒業論文提出間近ということもあり、共同で執筆していただきました。

#### 新入生歓迎行事 能楽鑑賞会観覧記（九月十四日）

能楽が持つ時代の重なりに触れて（担当…装束）

二回生 中西ことの

私は今回、学会委員としてのお手伝いを兼ねる形で、能楽鑑賞会に参加した。はじめこそ、せっかくの能の演舞を現地で鑑賞できる、幸運な機会だと思っていた。しかし、実際に参加したことで私自身が最も強く心惹かれたのは、役者さんの着付けを実演して頂いた部分であった。

私はこの二回生の前期に、日本の風俗文化史に纏わる講義を受講していた。講義の中で先生が、葵祭での斎王代を着付ける様子を記録した映像を紹介されたことがあったのだが、その際「このような資料は二つと例のない貴重なもの」と仰っておられた。そのこともあり、私は今回の能楽の着付けを生で拝見するというのは、この先二回と経験できるものではないと思い、非常に嬉しく感じた。

着付けのモデルを務めてくださったのは、ご自身も京都女子大学がご出身の、松井美樹さんだ。能楽の衣装は一人では着ることが出来ないものであり、役者に着付けを行う二人と、その補助を行う一人を合わせ、最低三人が必要であるというのが味方先生の

お話であった。

着付けが行われる際、「おあたり」や「おしまり」といった聞きなれない言葉が合図のように使われていた。味方先生のお話によれば、能楽は將軍様の前でも行われていた舞踊であった。もし、衣装による身体の締め付けで役者が能を演じられなくなった場合、着付けた者はその責任を問われ、切腹を命じられてもおかしくない事態になったという。二つの合図のような言葉は、着付ける者が役者を舞台上に上げた際に責任を問われないようにするための約束事が、今も伝統として残されているものであった。

このお話のほかにも、今回の着付けの実演で登場した衣装の鱗模様「鬼」の象徴とされているということなど、能が完成した時代を感じる伝統をその端々から見取ることができた。また、味方先生が「能楽衣装はそのままでは歩くことも難しいので、独特の着付けを必要とする」と解説されていた。そのお話の通り着付けをされている最中は、衣装がとても重たそうだと見ている側の私まで感じるほどだった。しかし、その後の実演で、衣装を着た松井さんが舞台の上で軽々と跳ね、優雅な動きをされる様には圧倒され、着付けの際に私が想像したその衣装の重量を忘れていた。

今回の能楽鑑賞会の、特に「装束着付・実演」の箇所では、時

代を超えて培われた着付けの工夫と、役者の技術によって能が作り上げられているということを感じる、とても興味深いものだった。

### お囃子の話を聞いた感想（担当…お囃子）

二回生 坂野 来夢

昨年度は中止になってしまった能楽鑑賞会が、リモート形式ではあっても今年度は無事に開催されたことをとても嬉しく思います。それだけでも十分なところを、国文学会委員の手伝いの関係から生で鑑賞することができ、とても贅沢な時間を味わわせていただいたと思います。どの番組も面白かったです。私はお囃子についての話の感想を書いています。

お囃子で使われている楽器の特徴についての説明がありました。私の知らないことばかりでした。まず、笛に西洋の楽器のような音階がないことに驚きました。管楽器はドレミファソラシドと調律が整っているものだという先入観があったので、笛の音を一音一音聞いたときには違和感がありました。お囃子の演奏を聞くだけでは絶対に知ることができなかったことだと思います。また、小鼓と大鼓とでは小鼓の方が音が低いというのも、大きい楽器ほど音が低いという西洋の楽器とは違う特徴で不思議に感じま

した。

特に印象に残っているのは、大鼓は舞台の始まる直前まで炭火などで乾燥させてから使用するという話です。扱いが難しそうなお楽器だと思いましたが、硬く鋭い高音が出るのはしつかり乾燥させているからなのだとわかりました。

これまでも能楽を鑑賞する機会はありましたが、お囃子について様々な話を聞いたのは今回が初めてでした。能楽の鑑賞では、つい舞台の真ん中で演じている役者さんにばかり集中してしまいがちになります。ですが、また能楽を見ることがあったときは、お囃子にももつと耳を傾けて楽しみたいと思いました。

### 能楽鑑賞会に参加しての感想（担当…狂言）

二回生 谷口 凧

私は、講読中世Aの授業で狂言について学習したが、それでもやはり難しいものだと感じていた。もちろん、授業でも動画で狂言を見ることはあったが、あまり笑うことはなかった。今回、実際に狂言を見て、思っていたよりも笑うことができるものだと感じた。

まず、茂山忠三郎さんが狂言について、説明してくださった。狂言とは、室町時代に能と共に発達したセリフ劇である。能が幽

玄、抽象的で難しそうなものに対して、狂言は、面白おかしく、庶民の日常生活を題材にしたもので、身近に感じることができる。また、能はほとんどの場合に能面を使用するが、狂言は基本的に直面である。狂言で使用する狂言面もあるが、使用する曲は少ない。また、狂言に囃子が付くことはあまりなく、使う道具は扇だけである。現実には扇を持って演技をしているだけであるから、私たちの頭の中で、想像して完成させる必要がある。茂山忠三郎さんは、狂言というのは、なんとなく楽しんで良い、面白いときには笑って良いものだとおっしゃった。そのため、私は難しいことは置いておいて、目の前の狂言に集中することができた。

鑑賞した狂言は「寝音曲」というものであり、これは、太郎冠者は謡が上手であることを知った主が、太郎冠者の勤務中に謡わせようとす。太郎冠者は、ここで謡ってしまうと、事あるごとに謡えと命じられるだろう、それは面倒だと思い、あの手この手で逃げようとす。しかし、最終的には主の策略に嵌められてしまい、舞までつけて謡ってしまう。

私がこの狂言の中で気に入った部分は、四か所ある。まず太郎冠者が、主の口真似をして、「やれ謡え」と言うとき、その口真似が、勤務に含まれない労働をするのが心底嫌なのだとはっきり伝わる。それは、まるで、「飲み会なんて行きたくない」とい

う現代人の悩みに近いものを感じて笑ってしまいました。次に、主が太郎冠者に、なんでもいいから早く謡ってみせろと言い、太郎冠者が返事をするときの、「はい」の言い方が、いかにもしづぶという感じがして笑ってしまいました。次に、太郎冠者の悪い癖には、酒を飲まないとうまく謡えないことと、妻に膝枕をしてもらわないと、うまく謡えないというものがあり、そのため主が太郎冠者に酒を飲ませ、そして膝枕をしている場面がある。主は太郎冠者をゆっくり起こそうとして、それに気づいた太郎冠者は声が出ないフリをする。おそらく、酔いがまわってきて、寝ているのか立っているのかわからなくなつて、ゆっくり動かされると気づいて、謡うのをやめてしまうが、ぱっと動かされると気づかないで歌い続けてしまい、更には、ご機嫌になって舞もつけてしまう。その切り替えの部分に笑った。最後に、それに対して、主が、上手で面白かつたぞと太郎冠者に言うと、太郎冠者はきょんとする。そこで、主はもう一度、上手で面白かつたぞ、というと、太郎冠者はしまったという顔をして逃げるところで舞台は終わるのだが、そこでも笑ってしまいました。

私は、堅苦しいことをすべて忘れて狂言の世界に引き込まれ、笑い、現代の漫才をみた後と同じ楽しい気分になった。狂言の良いたところは、まさにこの部分だ。古典文法がわからなくても、少

し言葉がわからないところがあっても、きちんと笑うことができる。肩肘はらずに、鑑賞を楽しむことができる。狂言を生で見る機会などこの先あるかどうかかわからない。今回、能楽鑑賞会が無ければ、私は、狂言を何が面白いのかよくわからないが、授業で学習したものという認識で一生を終えていたかもしれない。このような機会があつて本当に良かった。

### 能楽鑑賞会感想文(担当:能)

二回生 横山 亜希

先日の能楽鑑賞会を経て、感じたことが沢山あります。初めて間近で「能」や「狂言」を鑑賞して、日本の文化の美しさや、壮大さ、迫力にとっても感動しました。

日本には「能」や「狂言」の他にも、「歌舞伎」や「落語」など、伝統的な文化があります。例えば「歌舞伎」と聞くと、有名な歌舞伎俳優がぱっと思い浮かびますが、「能」と聞いても全くイメージが浮かび上がりません。それほど「能」を身近な文化であると感じていなかったもので、心惹かれるものがあつたのだと思います。

今回は「橋弁慶」という能の演目を鑑賞して、面白いなと思つた点が二つあります。

一つは、私が知っていたお話と設定が違っていて、全く別のお話を観たように感じた点です。牛若丸と弁慶のお話で有名なものは、千本の刀を集めるために人を斬る弁慶が牛若丸と京都の五条大橋で戦い、打ち破れた弁慶が牛若丸の家来として主従関係を結ぶエピソードだと思います。このお話を知っていたという人も多いのではないのでしょうか。しかし能の「橋弁慶」では、女装をして待ち構えていた人斬りの牛若丸と、それを退治する決意をした弁慶が戦うのです。ここでの牛若丸は人智を超えた化け物じみた存在になっています。少し設定が違うだけで、こんなに印象が変わるのかと、鑑賞しながら思いました。

二つ目は、目や耳で感じる以外に頭の中で想像して、自分だけの世界観で観ることができる点です。例えば、映画は目で映像を見て、耳でセリフや効果音を聴きます。一方で、能は耳でセリフや歌を聴き、目で演技や舞を見て、頭の中で場所や場面を想像して楽しむことができます。弁慶や牛若丸が橋の上で戦っているシーンを、実際に自分がタイムスリップして見ているように感じました。役者の迫力、謡が醸し出す雰囲気や空気感全てに飲み込まれました。

現代の生活で能楽などの伝統的な日本文化に触れる機会が少なくなってきた中、世界最古の舞台芸術として世界中で愛され

ている理由がよくわかりました。帰宅してからも能楽の動画や解説しているサイトなどを見るほど、気付かぬうちにはまってしまっている自分に驚きました。現在は新型コロナウイルスの影響で外出を自粛していますが、落ち着く日が来れば、ぜひ能楽堂に足を運んで鑑賞したいです。

### 能楽鑑賞会感想文（オンライン）

二回生 井上 蓮

この度は新入生歓迎行事として能楽鑑賞会を行っていただきました。私たち二回生はコロナ禍の中での入学であったため、新入生歓迎行事の開催は叶いませんでしたが、このように一回生の皆さんと共に参加する機会をいただきました。まずは、参加できるように準備してくださった先生方、能楽師の皆様には感謝いたします。

コロナ禍の影響により、オンラインでの開催となりましたが、能・狂言の面白さや迫力は、画面越しであっても感じることができました。私は高校時代から能・狂言に興味があり、実際に能楽堂へ行ったこともありますが、今回の能楽鑑賞会では普段は見ることのできない装束の着付けや楽器の詳しい説明をしてください、能・狂言の新たな面を知ることができました。その中でも、

特に驚いたことが二点ありました。

一点目は、装束についてです。私が知っている着物というのは一つの着付け方しかないものでしたが、能楽師の方の話によると、能では九種類ほど着付け方があるとのこと、今回は着物を腰に巻く着付け方を実際に見せていただきました。今までに見たことのない着付け方でしたが、まささらな舞台の上で行われる、能という芸能に合った、お客さんの想像力をさらに広げる一つの特徴でもあったと感じました。また、装束の着付けの際に、声掛けをしながら行う歴史的な背景も教えていただき、能楽師の方にとって舞台上上がることが真剣勝負であることを感じました。

二点目は、実際の謡や狂言の実演についてです。前に書いたように、私は実際に能楽堂で能を観たことがあるため、今回初めて参加するオンラインでの実演がどのように聴こえるのかを楽しみにしていました。迫力が少なくなってしまうのではないかと考えていたのですが、そんなことはなく、謡の迫力や物語の面白さを感じる事ができました。

楽器の演奏や謡は、普段聞く音楽とは異なり、重く濃厚なものでした。しかしその重さが登場人物の動きや景色を良く表しています。鮮明に情景を思い浮かべることができました。

狂言は話がとても滑稽で、家でリラックスしていることもあ

り、声を上げて笑いながら楽しませていただきました。伝統芸能というと、難しいものだと思いがちですが、昔も今も面白いこと、笑えることは変わらないのだと感じました。

今回は、現地に行つて鑑賞することはできませんでしたが、新しい形で能・狂言の面白さを知る機会となりました。まだまだ以前のような生活には戻れませんが、新しい生活様式のもと、今度は直接舞台で能や狂言を鑑賞したいと思います。

### 能楽鑑賞会に参加して（オンライン）

一回生 荒木 桃子

「能楽」と聞くと、「堅苦しくて取っ付きにくいもの」と感じる人も少なくないのではないのでしょうか。私も今回の能楽鑑賞会に参加するまでは、「興味はあるけどちょっと難しそうだし、内容をちゃんと理解できるか不安だな」と感じていました。しかし、事前に内容についてある程度学び、先生方のお話を聞いてから注意深く鑑賞すると、想像していたよりずっと親しみやすく、面白いものであると気が付きました。

私がまず感動したのは着付の実演でした。普段見ることができない工程を見せていただいて、本当に貴重な経験になりました。一人の演者に対して一人で着付を行っているのかと思っていたの

ですが、複数人で作業することを知り驚きました。着付をする方々が息びつたりで、夢中になって見ているとあつという間に完成しました。手際よく鮮やかに進んでいくので、一見簡単そうに見えましたが、実際は複雑でかなり練習が必要だろうと思いません。演者が舞台で動く時苦しくないように、一方で緩まないようにするために締めまり具合が大切であることや、「おあたり」、「おしまり」などの言葉があることも初めて知り、興味深かったです。

狂言「寝音曲」は、コミカルな演技で思わず声を出して笑ってしまいました。なんとか謡を謡わせようとする主人と、頑なにそれを拒否する太郎冠者のやり取りは、ユーモラスで愉快なもので、堅苦しさなどは全くありませんでした。表情や身体の動きが大げさで分かりやすいので、台詞を完全に聞き取ることができなくても何の問題もなく、誰でも親しみやすいのではないかと感じました。「橋弁慶」は、学校から近く、私も行ったことがある場所が舞台でドキドキしました。舞台全体を使って素早く動き二人が格闘する様子は、臨場感があり目が離せませんでした。非日常の体験で、世界観に引き込まれました。

今回の能楽鑑賞会はコロナウイルス感染症の影響によってzoomを用いたオンラインによる開催でした。実際に鑑賞するこ

とが叶わず残念でしたが、このような情勢の中、画面越しでも開催していただいたことを大変嬉しく思います。能楽は、古典の古い世界と現代の私たちをつなぐ架け橋になってくれる素晴らしい芸能だと思います。「堅苦しくて自分には難しいもの」と感じている人も、まずは一度鑑賞してみたいと思います。

### 能楽鑑賞会感想文（オンライン）

一回生 松下亥渚沙

今回の能楽鑑賞会に参加するまで、私の能への知識は中学生の時の修学旅行で能を鑑賞したこと以外なにもありませんでした。中学生の時は能を鑑賞するという物珍しさはあったものの実際に見てみると言葉は聞きとれず、面は不気味で正直なところよくわからなかったという感想を持ったことを覚えています。しかし、高校に入って古典を学ぶうちに芸能についても興味を持つようになり、地元を離れ京都の大学に進学するのを機にもう一度能を見たいという気持ちが生まれました。ですが、もう一度見たところで中学生の時のように物語が理解できず十分に楽しめないのではないかと不安があったため、初めの一步が踏み出せず鑑賞することはこれまでありませんでした。そのため今回このような鑑賞会があると知り、当日まで胸を躍らせていました。コロナ禍と

いうこともあり残念ながら生の舞台の空気を感じることはできませんでしたが、zoomを利用することによって家で気を張りすぎることなく鑑賞でき、より楽しめたのではないかと感じます。

能楽鑑賞会が始まってまず驚いたことは、女性が出てきたことです。歌舞伎のように女性は舞台上がってはいけなないものだと思います。歌舞伎のように女性に舞台上がってはいけなないものだと思います。ここで私は古典芸能の能や狂言、歌舞伎などの明確な区別や違いを知らなかったことに気が付きました。これでは自分で古典芸能のチケットを買って見に行っても、深く考えず物語を理解することのみに躍起になっていただろうと思います。今回能についての知識が増えたことで、今後古典芸能に触れる際にはより舞台を楽しむことができるだろうとうれしくなりました。

また、面が男性と女性で違うことにも驚きました。演じる物語によって決まっていて、誰が演じるかなどは関係ないと思っていたからです。そして、「能面のような表情」といわれる通り、表情に変化がないものだと考えていましたが、演じ始めると怒っているようにも笑っているようにも見え、中学生の時に感じた不気味さはここからきていたのかもしれないと感じました。今回のように着付けや音楽についての裏話を聞くことで舞台を見た時に気づきが生まれ、様々な角度から能を楽しめたいと思います。

最近では海外の映画などでも能面が使われていることがあるようです。京都で文学を学んだ者として日本の伝統芸能の面白さを多くの人に伝えるため、今後も積極的に情報を集め、生の舞台に触れていきたいと思いました。

#### 公開講座聴講記（十月二十九日）

##### 「漢文を読むということ」の初心へ

博士前期課程三回生 小 堂 藤 乃

このたび、滝川幸司先生のご講演「漢文を読むということ―申文の文体を中心に―」を拝聴しました。ご多忙の中ご講演をしてくださいましたこと、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。滝川先生には学部一回生の頃から講義でお世話になり、卒業論文含め大学院一回生までご教授いただきました。今回のご講演の最初にもお話がありました「対句を探せ」という言葉から、ご教授いただいていた頃のこと鮮明に思い出され、大変懐かしく感じておりました。大学入学当初は近代文学の分野に進もうと考えていた私ですが、滝川先生の講義（これも漢詩を対句から読み解く講義でした）がきっかけで漢文の世界に飛び込んだことは今

でも忘れられません。

さて、今回のご講演の内容は、佐藤信監修・朝野群載研究会編『朝野群載 卷二十一 校訂と註釈』（吉川弘文館・二〇一五年）にて取り挙げられている「清原定康受領吏申文」の末尾「望請、天恩。因准先例、依件等勞、兼任彼官。且仰憐老之仁、且誇奉公之節。定康誠惶誠恐謹言。」に付されている訓読と解釈への疑問に始まり、他の申文の実例と解釈を通じてこの末尾への正しい解釈を明らかにしていく、といったものでした。滝川先生は他の申文の実例より、本来は「天恩」の前に「蒙」とある文が定型文として広く用いられていたことで、この「蒙」が省略されるようになり、今回のような誤読を生んだのではないかと結論付けられていらつしやいました。そして、このような誤読を防ぐためにも単に漢文の字面を読むだけではなく、同様の表現が他の文においてどのように読まれているのかを知ることが重要であるとも仰っていました。

「漢文を読む」にあたり、字面だけを読むのでは正しい解釈はできず、他の実例や解釈を知る必要がある、ということはかねてより滝川先生にご指導いただいていたことではありますが、いざ実践しようとするとなかなか難しいものです。今回取り挙げられた申文はその一例ではありますが、常日頃から漢文に親しみ、

一つ一つ丁寧に読んでいくこと、そしてその日々を積み重ねて自身の知識の幅を広げていくことの重要性を改めて感じました。また、この姿勢を一貫して持ちながら日々漢文に向かうことで、研究の第一歩である、なんとなく感じる違和感や疑問を得ることができるのだとも思います。そのなんとなくの違和感や疑問を得ること、ひいては漢文研究の根本が「漢文を読むということ」のご講演には詰まっていました。

滝川先生のお話で、私自身「漢文を読むということ」の初心に立ち戻ることができました。この初心を忘れず、今後触れる漢文にも向き合っていきたいと思えます。最後に、今回の講演会では新型コロナウイルス感染症対策の一環でオンラインにて拝聴することになり、直接お話しする機会がなく残念でした。また以前のようなお話しできる日々が戻ることを祈っております。

### 「漢文を読むということ―申文の文体を中心に―」の「講演を拝聴して

漢文ゼミ四回生

今回の講座では、官位を頂きたいと天皇に願う「申文」が扱われていた。「申文」はパターンが決められており、途中からパターンにそって用語の省略が行われるようになっていったら

い。そのことを知らない人が書いた注釈書では違和感を覚える訳になっていた。滝川先生はそこに注目をされ、「申文」の変遷について用例を挙げながら説明するとともに、漢文を読むにあたって気を付けなくてはならないポイントを教えてくださった。それは、字面だけに注目すると読み間違えるというものだった。

私は二回生の後期まで滝川先生の指導を受けていた。今は漢文ゼミに所属しており他のゼミに所属している方より漢詩文に触れる機会は多いだろう。だが、今まで私は漢字の文字列を追うような読み方をしてきた。パターン化された文章と知らず読み違えていたことも多かっただろう。今回の講座は新しい知識を得るだけでなく、自分の間違いにも気付かせてもらうものだった。

(杉山 嘉子)

ご講演では、漢文の読み方だけではなく専門家も呼称に迷うような単語について触れていらつしやり、大変興味深く感じました。

先生は申文の「望み請ふらくは、天恩を。」という表現について「望んでいるのは役職であり天皇の恩徳ではない。」という考えを述べられていました。申文の例として挙げられた大江朝臣朝綱や大江朝臣成基の申文では病気の母や自分の苦しみを理由

に役職を願っているのを知り、私は初め、役職を決めるのは天皇の心次第であるから天皇の慈しみを願うのは正しいのではないかと考えました。

次に、「望請」はどこまでかかるかについて平兼盛等の申文に注目した際、願いを叶えて貰った結果どう報いるかという内容にまではかからないという事を聞き、「職業を得るために天恩を願っているのであり報いる事まで願ってはいない。」と考え、やっと願いの主要部分は役職を得る事だと思い、考えを改めました。また、申文の内容を一文にまとめる事書を言い換えたものがこの文法（表現の型）が使われている箇所であると知り、先生が冒頭で文法の中でも内容に深く関わるものを取り上げるとおっしゃっていた意味が理解できました。

(中川 碧)

滝川先生は『朝野群載』の注釈書を読んだ際に、「望み請ふらくは、天恩を。」という訓読について、「望むのは官職であり、天恩ではないのではないか」と疑問を抱いたそうです。それを出発点として、「大江成基申文」や「平兼盛申文」、新日本古典文学大系での句読点の使い方などと比較して申文の文体について詳しくご説明いただきました。

また、「蒙」という字は申文の中ではパターン化されていたことにより、省略されている例があること、「菅原文時申文」においては「特蒙天恩」を「鴻恩曲垂矜恤、殊施雨露之餘光」とし、「敘従三位」を「賜銀青之榮耀」と言い換えるといった文飾を施しているなど様々な例をご紹介いただき、その説明の一つ一つが分かりやすく、とても勉強になりました。

滝川先生のお話は「申文」についての知識が乏しい私にも非常に分かりやすく、漢文学への興味を一層引き立たせるものでした。また、それだけではなく漢文学を学ぶ上では古くからの形式を把握しておくことが重要であるということも今回の公開講座で気づくことができると共に、一つの疑問から多くのことを発見できる学びの面白さを再認識することができました。

(矢城 歩)

### 歌の神となった柿本人麿の話

三回生 青木 涼羽

今回の公開講座において、山形大学の藤田洋治先生によるご講演「平安時代の柿本人麿」を拝聴した。本講演では、『古今和歌集』をはじめとした平安時代の和歌集から見られる『万葉集』の扱いや人麿の人物像を確認しながら、人麿和歌とされた和歌につ

いての考察が展開された。

はじめに、人麿画像はなぜ老人の姿で描かれるのか、という疑問が投げかけられ、平安時代から見られる人麿影供についての説明がされた。この人麿画像は、良い歌が詠みたいと人麿を念じていた藤原兼房が夢の中で見た老人を絵師に描かせ、一番似ているものを宝としたことで良い歌が詠めるようになったという逸話に基づくことであった。また、人麿は『万葉集』の時代からすでに「山柿の門」として偶像化されていたが、平安時代では「歌聖」、さらには「歌の神」として扱われるほどに優れた歌を詠んだ人物として認識されていたことが確認された。

このように人麿は、神のように優れた歌を詠む歌人として評されていたわけだが、それは『古今集』以降の和歌集に見られる、多くの伝人麿歌から窺うことができる。しかし、これらの歌の多くが人麿の歌ではないことが指摘されている。例に挙げられた歌を見てみると、『万葉集』では見られない表現が用いられていたり、古今時代の流行表現が用いられたり、人麿が詠んだ歌として認められない要素がかなり確認できた。さらには、女性の歌までもが人麿歌の中に含まれているようであり、「古い歌はとりあえず人麿の歌にしておこう」という思惑が見えるのが面白いと思った。当時の人々がどのように人麿歌として判断したのかは

わからないが、それだけ平安人にとって人麿が歌人としての比重の多くを占めていたのだと考えられる。

今回のテーマからは少し逸脱するが、『三十六人撰』の人麿の項目に見られる「あすからは若菜つまむと片岡の 朝の原はけふぞやくめる」（拾遺18人丸）という歌について、藤田先生が春になって若菜を摘むことは当時の人にとってはとても楽しみなことだったのだと補足されていたのが印象的だった。確かに現代は当時とは違い、季節に関係なく食を楽しむことができる。そのため、右の歌のような冬が明けた喜び、若菜を摘める喜びは現代人にとっては理解しがたいものである。しかし、現代の感覚に頼って和歌を解釈することは、歌の真意を正しく汲み取ることの妨げとなりかねないため、気をつける必要がある。当時の常識と感覚に寄り添って和歌に触れることの重要性を改めて感じることができた。

本講演において藤田先生は、平安時代における人麿は、不思議な歌を多く残した歌人として捉えられていたのだと締め括られた。中でも恋歌の数が多くを占めていることから、人麿は恋歌を詠むことに長けた歌人として認識されていたようにも窺える。このことから私は、当時の人々が万葉時代の恋歌を、すなわち人麿作歌だとする一種の傾向のようなものがあったのかという疑問を

抱いた。今後、自分でも調べてみたく、人麿への新たな興味を抱くきっかけとなった。

## 二〇二一年度公開講座を拝聴して

三回生 安田なつみ

今回の公開講座では、平安時代における『万葉集』の享受を研究されている藤田洋治先生より、平安時代は『万葉集』の和歌をどう享受していたか、万葉歌人の柿本人麿は平安時代にはどのような人物として捉えられていたのか、というお話を拝聴した。

享受研究というのは、文学分野においては、文学作品の後世での受け取られ方がどのようなものであるかという研究だが、文学作品に関連する人物についても享受研究が行われているということはあまり考えたことがなかったので、興味深く感じながらお話を伺った。

では平安期には柿本人麿はどのように受け入れられていたかというところ、まず、平安人が抱いていた人麿のイメージ図は、おじいさんの姿なのである。なぜなら、藤原兼房というたった一人の人物が、良い和歌を詠みたいと人麿を念じると、それらしき老人が出てくる夢を見たからだそうだ。何のことはない。夢に「本人」が登場しただけのことである。

さらに、困ったことに『古今和歌集』や『拾遺抄』などの平安期の様々な歌集では、人麿歌の多くが人麿の作ではないのだ。そのほとんどが恋の歌で、『万葉集』にない歌でも、人麿歌として認識されている歌が多くある。しかしこれとて何のことはない。「読み人知らずの古そうな歌は人麿歌にしまえ」という平安人がいただけのことである。

こういったお話を聞きながら、享受研究というのはとても面白く感じた。何をそんなに面白く感じたかと言うと、文学作品の享受事情は文学作品に現れる、という関係性である。特に平安中期に編纂された『人麿集』は、人麿作でない人麿歌が多く、平安時代における人麿理解のあり方を知るのに重要な歌集であるとのことだが、文学への理解は他の文学作品に受け継がれるという享受のあり方に関心を抱いた。

そういった研究というのは、歴史研究にかなり近いものがあるだろうが、似て非なるものであるとも感じる。もちろん、歴史研究とも関わり、文化的な研究とも関わり、他の分野とも相互に影響を与える部分はあるだろう。それら自体が文学研究に欠かせない要素でもある。しかし、文学への理解、受け入れ方を知るにはどこまでも文学を辿らねばならないのではないだろうか。

私はそれが嬉しい。昔の文学作品に触れた人々が、その文学へ

の理解を「今」の文学に書き記してきたのも、それは文学世界の中で起こった出来事であり、あくまでその世界の中で共有することであるという思いが見えるようだ。文学を知るための手段はどこまでも文学の中にあるのである。文学に思いを寄せる人間には、それが嬉しい。

私は今回の公開講座を拝聴しながら、そういったことを考えていた。藤田先生のお話は、自らにとって遠目にしか見たことのない分野への興味開拓であり、文学研究や享受研究に対する印象を新たにしたものであった。このように文学研究に対して考えを巡らせたことは、自分のこれからにとって糧になることは間違いない。

## 『女子大國文』 投稿規定

### 一、(投稿資格)

- ① 京都女子大学国文学会の会員は投稿することができる。
- ② 京都女子大学国文学会の会員以外の者も、編集事務局の判断で寄稿を認める。

### 二、(刊行回数・時期・投稿の締め切り)

- ① 毎年二回、九月と一月に刊行する。
- ② 毎年、五月十日と九月三十日を投稿の締め切りとする(厳守)。

### 三、(投稿の枚数)

枚数は原則として自由であるが、四百字詰原稿用紙、四十枚(注・表・図版などを含む)を目安とする。また、完全原稿であることを原則とする(多少の加筆訂正はやむを得ないが、段落や章の差し替えなど大幅な修正を加えたものは、査読を行う関係上不可)。

### 四、(投稿に際して提出すべきもの)

- ① 手書き原稿の場合、投稿原稿二部(審査用。二部ともコピーしたものでも可)。
- ② ワープロ原稿の場合、プリントアウトしたものの二部(審査用)と、投稿原稿が収められている電子データ(ワープロ専用機の場合は機種、パソコンを使用の場合はワープロソフト名を通知すること)。

### 五、(投稿に際しての注意事項)

- ① 論文末尾に所属、回生、卒業年度などを丸ガッコに括弧で記すこと。本学の教員・院生・学生の場合は、(本学教授)(本学大学院博士後期課程)(本学文学部国文学科四回生)などと記す。

- ② 連絡先の住所を記した別紙を添えること(採否の知らせや校正送付等のため)。その際、投稿原稿についての連絡事項をすみやかに行うために、差し支えなければ、電話番号・ファックス番号・メールアドレスなども添えること。内部の教員・院生・学生は直接原稿のやりとりをするので、住所は不要だが、必要に応じて電話番号やメールアドレスを『女子大國文』編集事務局から聞くことがある。これらの個

人情報については、投稿原稿についての連絡以外に使用することはしない。

③ 原稿については、引用の正確さと厳密さ、出典の明示、先行研究との重なりなどに留意すること。また二重投稿にならないように気を付けること。

#### 六、(投稿先)

〒六〇五―八五〇一 京都市東山区今熊野北日吉町三五番地

京都女子大学国文学会

『女子大國文』編集事務局

#### 七、(投稿論文の採否)

投稿論文の採否は、編集委員の査読、または関連分野の外部研究者査読の結果を経て、編集委員会にて決定し、結果を投稿者に通知する。

#### 八、(校正)

校正は原則として、再校までとする。校正段階での大幅な修正は、査読を経た関係上認められない。

#### 九、(本誌・抜き刷りの贈呈)

投稿論文が掲載された場合、本誌二部、抜き刷り三十部を贈呈する。増刷希望の場合は、実費執筆者負担で受け付けるので、採用の通知を受けてからすみやかに『女子大國文』編集事務局まで連絡すること。

#### 十、(掲載論文の著作権及び電子媒体による公開)

本誌に掲載された論文等については著作権の複製権・公衆送信権を京都女子大学国文学会及び京都女子大学に許諾するものとする。但し、著作権の移動はなく、著作者は両者、或いはいずれか一方への許諾をいつでも取り消すことができる。

本誌に掲載された論文等の全文又は一部を電子化し、京都女子大学学術情報リポジトリサーバ或いはその他のコンピューターネットワーク上で公開することがある。

#### 十一、(規定の改正)

- ① 本規定の改正は、会員の議決を経なければならない。
- ② 規定の改正の結果は、すみやかに本誌に掲載する。

## 附則

本投稿規定は平成十八年三月二十日より施行する。

本投稿規定は平成二十三年十月五日より一部改正施行する。

本投稿規定は平成二十四年十月二十四日より一部改正施行する。

本投稿規定は令和三年四月一日より一部改正施行する。

## 編集後記

今号の査読委員は次の方々です。

小山順子・坂本信道・大谷俊太

以上の各氏に査読を依頼し、編集委員会において査読結果を報告、審議の結果二点が掲載となりました。

また、大阪大学の滝川幸司先生に公開講座の御講演内容を御寄稿賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。

今後とも、会員の皆様の投稿をお待ちしております。

(坂本・中西)